

「あなたの行かれる所へ私も」

ルツ記1章～2章（朗読は 1:1-22）
～ルツの生涯（1）～

はじめに

聖書には、女性の名がつけられた書が二つあります。ルツ記とエステル記です。今回は、ルツ記から、ルツの生涯を2回に分けて学びましょう。

ルツ記が教えようとしているのは、「神の摂理」です。「神の摂理」とは、神の備え、守り、導きです。ローマ人への手紙 8章 28節にこうあります。「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを私たちは知っています」。

ルツは、ダビデ王の祖先、そしてイエス・キリストの誕生にもかかわって行くのです。

この神の備え、守り、導きをルツ記から学びましょう。

今朝は、1章と2章から「姑ナオミとルツ」、「未来の夫ボアズとの出会い」を学びます。

1 姑ナオミとモアブの女ルツ（1章）。

時代は、「さばきつかさが治めていたころ」とあるので、紀元前 1150年頃、モーセの後継者ヨシュアの後、王政が出来る前の不安定な時代、霊的にも暗い時代でした。

(1) ナオミー家はベツレヘムからモアブへ（1章）。

その時代に飢饉があり、ベツレヘムに住むエリメレクという人が、妻のナオミと息子のマフロンとキルヨン連れてモアブの地に逃れ、住みつきました。ベツレヘムは「パンの家」という意味ですから、穀倉地帯で食料には恵まれていたはずですが、そのベツレヘムを離れる決心をしたのですから、余程の飢饉と思われる。

二人の息子のうちマフロンは「病める者」。キルヨンは「消え失せる者」という意味ですので、共に生まれながら病弱な子どもたちだったのでしょう。両親は、その息子たちのことも思って安全なモアブの地へ行ったのでしょう。

例話：実は私も子どもの頃、とても病弱で、体じゅうにおできが出来て、目と鼻だけを出して包帯でぐるぐるまきにされていたようです。戦争が激しくなった昭和 19年に東京の神田にいたのでは危ないというので、郊外に引っ越すことにしました。その時に父が捜した場所の条件は、「近くに医者がいること」だったそうです。住みやい所は他にもあったのですが、当時「医者村」と呼ばれていた「自由が丘」近くに決めたそうです。

彼らが行ったモアブの地は、アブラハムの甥ロトを先祖にする民族で

すが、神の民を呪ったため、神の民に加えてはならないと言われていました。

(2) モアブの女ルツ。

モアブの地に行ったエリメレク一家でしたが、エリメレクは死に、ナオミと二人の息子が異郷の地で残されました。ナオミは、息子たちだけが頼りでした。そして彼らはそれぞれモアブの女を妻に迎え、ナオミはわずかな安心を得ました。マフロンはルツと、キルヨンはオルパと結婚しましたが、二つの家族に子は生まれず、10年後に病弱だった二人の息子は共に死んでしまいました。夫に先立たれただけでなく、息子達にも死なれて、不幸のどん底に落ちたナオミを慰めたのは、二人の心やさしいモアブの嫁たちでした。

適用： 私たちも、自分では間違っただけを思っているだけで行動するのですが、困難に出会い、不幸な目に遭うことがあります。しかし、神様は見捨てておられません。救いの御手がそこにあります。

(3) 姑ナオミとルツはベツレヘムへ。

モアブの女ルツとオルパは、気だてのよい嫁でした。が、それにもまして、ナオミはこの二人を可愛いがりました。主がご自分の民を顧みて、彼らにパンをくださったと伝え聞いたナオミは、故郷ベツレヘムに帰ることにしました。そして、ルツとオルパに「自分の母の家に帰りなさい」と勧めます。それは何より嫁たちの幸せを思っただけのことでした。「あなたがたが、なくなった者たちと私にしてくれたように、主があなたがたに恵みを賜り、あなたがたが、それぞれ夫の家で平和な暮らしができるように主がしてくださいますように」(8-9)。しかし、二人は泣いて「あなたの民のところあなたと一緒に帰ります」と言っただけです。ナオミは、「それはいけません。私を苦しませるだけよ」と無理にでも返そうとします。ルツとオルパは声を上げて泣き、オルパは分かれて行きますが、ルツはナオミにすがりついて離れません。そしてルツは言います。「あなたを捨てて、あなたから分かれて帰るように、私にしむけないでください。あなたの行かれる所へ私は行き、あなたが住まわれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです」と。

ナオミはルツの決意の固いのを見ると、それ以上は何も言えず、二人はベツレヘムに着きました。

適用： ルツにここまで言わせたのは、ナオミの愛でしょう。ナオミは、ルツを本当に可愛いがったのです。ルツは、病身の夫マフロンに尽くしました。それをナオミは知っています。そしてルツは、ナオミのうちに信仰を見たのです。ルツは、主を知ったのです。

家庭伝道ほど難しいものはないと言われます。でも、このナオミの姿は模範です。ナオミは、異教の女ルツを主に導きました。

今日、夫婦の間でも、嫁姑の間でも、これと反対のことが起こっています。「あなたの行く所へは行きたくない。あなたの住むところに住みたくない。あなたの死ぬ所で死にたくない。一緒のお墓に入るのはごめんだ」。

愛がないのです。愛が人を変えるのです。

私たちがイエス様について行くのも、イエス様のためなら何でもするというのも、イエス様が私たちを愛してくださっているからです。イエス様の愛を知れば、何も言わなくても、イエス様を悲しませてはいけないと思い、イエス様に喜んでいただくとうします。

決断：今、イエス様が私たちをどれほど愛してくださっているかを考えて見ましょう。その愛を感じてください。

2 未来の夫ボアズとの出会い（2章）。

帰って来たナオミは、「私は満ち足りて出て行きましたが、主は私を素手で帰されました」と言いました。夫の名義になっている畑を売らなければならないほど、貧しくなっていました。その時、主は、この機に思ってもみない事をナオミとルツになさったのです。

（1）はからずもボアズの畑に働く（1-3）。

ルツはナオミに、「どうぞ畑に行かせてください。私に親切にしてください。ださる方の後について落ち穂を拾い集めたいのです」と言います。

適用：「落ち穂拾い」といえば、ミレーの絵が有名です。ミレーは農村に育ち、パリで絵を学びますが、やがて農村に住み、農民の絵を描き続けます。「種蒔く人」「落ち穂拾い」「晩鐘」などの絵は、見たことがあるでしょう。

この「落ち穂拾い」は、旧約聖書にお知られている、福祉政策です。「あなたがたの土地の収穫を刈り取るときには、畑の隅々まで刈ってはならない。あなたの収穫の落ち穂を集めてはならない。またあなたのぶどう畑の実を取り尽くしてはならない。あなたのぶどう畑の落ちた実を集めてはならない。貧しい者と在留異邦人のために、それらを残しておかなければならない。わたしはあなたの神、主である」（比 19:9-10）。

そして、ルツは「はからずも」ボアズの畑の落ち穂を拾ったのです。ボアズは、ナオミの親戚で、とても信仰の厚い、立派な人でした。

（2）ボアズの親切に助けられる（4-23）

ボアズは、ルツの噂は耳にしていました。そして、ルツに「ほかの畑に行かずにここで落ち穂を集めなさい。水も自由に飲みなさい」と親切に言いました。ルツは、「私が外国人であるのを知りながらどうして親切にしてくださるのですか」と尋ねました。

するとボアズは、「あなたの夫がなくなってから、あなたがしゅうとめにしたこと、それにあなたの父母や生まれた国を離れて、これまで知らなかった民のところに来たことについて、私はすっかり話を聞いています。主があなたのしたことに報いてくださるように。また、あなたがその翼の下に避け所を求めて来たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように」と行ってルツを励ましました。

適用：ルツの評判は、人々に伝わっていました。だからボアズはルツを助けたいと思ったのです。日頃の生活がいかに大切であるかが分かります。人に親切にしておけば、困った時に助けてくれますが、人に憎まれていたら、困った時にだれも助けてくれません。

どうしたら、商売が繁盛するのか。この世で成功するのか。それは、いかに人に良くするかです。どんなに無能な人でも、友だちがたくさんいる人は成功しますが、どんなに有能でも友だちがいなければだめです。商売とは、物を売るのではなく、心売るのです。日本のトップセールスマンは、木訥な東北人が多いと言われます。

ルツは、ボアズの親切に助けられ、十分な物を拾い集め、ナオミと一緒に暮らすことが出来ました。ナオミは、ルツが「買い戻しの権利」のあるボアズと会ったことを知り、主をほめたたえました。主の備えです。

結論

ルツの生涯の前半を学びました。ルツは、異教のモアブの女でしたが、マフロンと結婚することで、ナオミに出会い、夫に死別する不幸に会いましたが、ナオミの信仰を見て、真の神、主を知るようになり、幸せの道が開かれていきました。ルツは、ただ主に従っただけですが、主が道を開いてくださったのです。

神様は、天地が造られる前から、私たちをキリストのうちに選び、神の子になるように定めてくださいました。イエス様は、私たちを愛し、私たちの身代わりとなり、私たちの罪を負って死んでくださいました。イエス様の死は、多くの人々の救いになりました。神様は、イエス様を死から生き返らせ、私たちの救い主としてくださいました。イエス様は、あなたの救い主です。

あなたが今どんな状況にあるとしても、あなたは神様の御手の中にあります。神様は、あなたのために、備え、守り、導いてくださいます。

あなたは、自分が神様ののものであることを確信していますか。あなたの力は主から来ることを知っていますか。

神様の備えと守りと導きを信じ、神様が働いてくださることを信じていきう。